



Title	楼蘭故城
Author(s)	荒川, 正晴
Citation	月刊しにか. 1996, 7(1), p. 64-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88452
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【特集】

中国主要遺跡
ガイド

ろうらんこじょう
樓蘭故城

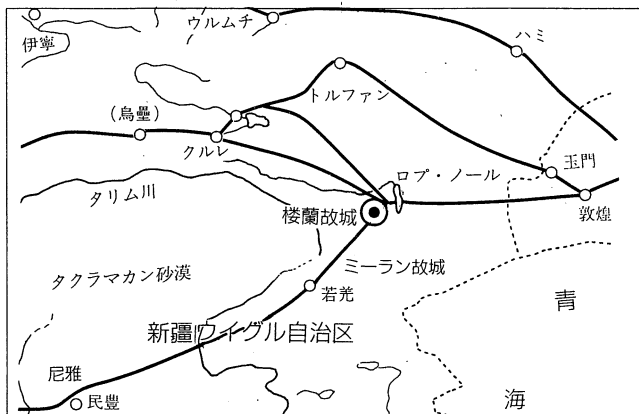
樓蘭故城と言えは、通常スタインによつて「LA」と編號された城址を指し、「さまよえる湖」として有名になったロプノールに榮え、五世紀にはその姿を消したと言われる樓蘭王国(鄯善王国)の都の跡とも考えられてきた。しかし、少なくとも魏晉時期においては、ここは中国軍の駐屯地(西域長史府の治所)となつていたと指摘されている。これまでは、近辺に核実験場があるためか、新疆ウイグル自治区の多くの都市が外国人に開放されて以降も、この故城には容易に立ち入ることはできなかったが、ごく最近、樓蘭故城をめぐる一般のツアーが企画されている。

この故城は、一九〇〇〜〇一年に、ヘーデンによつて発見・調査され、その後、スタイン(一九〇六年、一九一四年と大谷

探検隊(一九〇九年、一九一一年)が前後して発掘調査を行った。さらに一九二七年には、西北科学考查団に参加した黄文弼(ワング・ベンビ)とペリイマンが調査し、しばらくの空白期間を置いて、一九七九年以降、中国隊による學術調査が開始されている。

最新の報告によれば、故城は、ほぼ正方形(東辺三三・五メートル、南辺三二・九メートル、西辺・北辺三二・七メートル)のプランをもち、総面積一〇万八二四〇平方メートルの規模をもつ。西域のオアシスに作られる城郭が、方形のものもあるが、環形・橢円形もしくは不正形のプランをもつことが多いことを考慮すると、この故城の城郭プランは、あるいは中国軍の進駐の結果とも想像される。また故城内は、西北隅より東南隅に延びる古水路によつて二分され、そのうち東北域は仏塔(ただし烽燧台(外敵の

侵入等を監視し、異変を速報するための煙火台)説あり)を中心とする寺院区、また中央から西南域は、官衙址とも言われる「三間房」を中心とする「官署区」およびその周辺居址を中心とする「住宅区」から成るとされる。



ヘディンやスタインらによって楼蘭故

城が調査された折、「官署区」から多くの木簡と紙文書（三世紀後半から四世紀前半ごろ）が発見され、魏晋期の楼蘭における中国軍兵士の屯戍^{とんせう}の実態や当時の西域の動静をうかがわせる貴重な史料を提供している。さらに一九八〇年の三月から四月における中国の考古工作隊による発掘作業でも、ほぼ同じ出土地点より、新たに漢文の木簡（六三・三三・紙文書二点）総計六五点とカロシュティイ文字が記された木牘一点が出土している。即ち、先の「三間房」を中心として、その東側の小部屋から紙文書一点を、またその東北方面にある遺構からも、木簡一点を発掘している。同地点からは、スタインは漢文文書のほかにソグド文書も発見している。さらに「三間房」の西約三五メートルの地点に大きな廃物堆積場があり、ここから漢文木簡六一点と紙文書一点およびカロシュティイ文木牘一点を獲得している。ここでもスタインは、二回の発掘を通じて漢文・カロシュティイ文以外に、ソグド文書を発見していることに注目され

る。

これらの出土史料は、漢文のものは、当地に駐留する屯兵の名籍および彼らが日常的に利用・消費する武具類・馬畜・糧食の帳簿類を始めとして豊富な内容をもっており、魏晋期の西域長史に統轄された中国軍の活動を具体的に伝えてくれる。当時の西域長史と言えば、「李柏文書」の発見で有名になった李柏の名を思い浮かべるが、新たに発見された木簡のなかには、□□張□長史 □（80LB.T.001）と見えるものもある。かつてスタインが発見した木簡中（CH.751<LA.VI.ii.0200>）にも、「西域長史 張君」の名が見えており、この張某が、この楼蘭故城の最高官として存在していた時期のあったことが知られる。

この楼蘭故城が、魏晋時期に西域長史府の治所として機能していたらしいことは、冒頭にも述べたが、そうした中で、点数は少ないながらも、楼蘭故城址からは、先にも触れたように漢文やカロシュティイ文以外にもソグド文の文書が併出している。このソグド文の正確な読みと

その年代は、今後の詳細な検討を待つほかないが、もしこれが魏晋期に属するものであるとすれば、漢人が支配する西域長史府においてソグド人がどのような活動をしていたのか、その一端を知ることができものと思われる。敦煌周辺より出土した四世紀の「ソグド人の手紙」とともに、当時の国際商業活動の姿を知る上でも重要な史料となる。

（荒川正晴）

◆ DATA

所在地…新疆ウイグル自治区、巴音郭楞蒙古

自治州・若羌県の東北二二〇キロ、

庫爾勒市の東南三四〇キロ【東経

89°55'22″、北緯40°23'55″】

時代……五・六世紀頃

参観……可（一部の出土品は、新疆維吾爾自

治区博物館に展示）